



和歌山

第91号

平成29年
1月31日

仙台市小学校長会

発行者／成田 忠雄（会長） 責任者／今野 克則（広報部長）

主張

「いつか、当たり前になる」 防災・安全への取組

副会長 高橋 智男（七郷小学校）



「夜空見上げて思い出す あの日の星のかがやきを 日差しを浴びて思い出す あの日の人のあたたかさ……」これは、復興ソング「希望の道」の歌詞の一部である。復興ソングは、故郷復興サミットで制作が決まり、「希望の道」は、約400点の応募の中から選ばれたもので、当時6年生の児童が様々な思いを込めて作った詩である。あの日から約6年が経過し、小学校在学中に大震災を経験した子供たちは卒業し、記憶の片隅に大きな揺れにおびえた経験が残っている子供たち、大震災の記憶がほとんどない子供たちが大多数を占めるようになってきている。このような現状で、復興ソング「希望の道」に込められた、あの日の様子、人々の温かさ、復興に向けての思いなどは、震災の記憶を風化させることなく、教訓として継承していく上でも貴重なメッセージであると改めて感じる。

地震や台風・集中豪雨等の自然災害の恐ろしさ、その対策や備えの大切さや必要性が一層クローズアップされている今日、防災・安全に関する取組を学校経営にしっかりと位置付けていきたい。子供たちに身に付けさせたい「自分の身は自分で守る力」（自助）、「地域住民の一人として支え合い、地域のために役立とうとする態度」（共助）は、すぐに身に付くものではなく、6年間の系統立てた計画的な学習活動に求められる。子供たちが防災への備えや安

全を確保するための学びを進めるに当たり、常に自分のこととして考え、行動を起こしていく学習活動が大切であり、主体的に学ぶ場面を意識した授業づくりが求められる。これは、次期学習指導要領の方向性に示されている「どのように学ぶか」の視点からの授業改善につながるものでもある。

学校教育では、安全を含めた防災教育を推進し、子供たちが「自助」「共助」の資質・能力を身に付けるとともに、自然災害に負けず、自分の将来や社会に夢と希望を持って、これからの生活を切り開いていく素地を養っていきたい。また、学校、地域が一体になった合同防災訓練は、中学校と連携しながら回を重ねたい取組である。この取組を通じた地域のつながりが防災につながるという認識を共有したい。校長として、安全で安心な学校づくりを進めていくために、防災・安全に対する意識を一層高めていかなければならない。

防災・安全に関する取組が「当たり前」に行われ、避難訓練の際、迅速かつ真剣に取り組む姿が「当たり前」であり、地震の揺れを知らせる校内放送が流れるや静かになり、一斉に放送に聞き入ることが「当たり前」の学校でありたい。某通信機器企業のスローガン「いつか、当たり前になるように」を耳にするたびに、校内の様々な取組がそうありたいものだと考える。

内 容

○主 張	張	1
○特 集	集	2
○座 談	談	3
○提 言	言	16

○学区紹介	18
○研修部から	19
○生徒指導部から	21
○新任校長所感	22
○編集後記	24

特 集

ふるさと 東六郷 栄あれ

鈴木 一彦（東六郷小学校）

本校は明治6年6月に六郷小学校種次分教場として始まりました。その後、学校制度によりいくつか変遷があり、昭和32年4月1日に仙台市立六郷小学校種次分校から独立、仙台市立東六郷小学校として開校しました。全校児童339名、9学級で始まり、今年で開校60年の節目を迎えました。この間に約1600名が学び舎を巣立ち、様々な分野で活躍しています。

自然豊かな東六郷地区は、先祖代々の土地を守り、野菜作りや稲作を中心に栄えてきました。地域の学校教育活動に対する思いが強く、行事等への積極的な参加など、協力を惜しみなく注ぐ地域でした。

しかし、平成23年3月11日、あの東日本大震災が発生し、その後、約2km離れた沿岸部から押し寄せてきた津波により、家屋や耕し守ってきた田畑が流されました。校舎一階にも津波が入り、教育施設に甚大な被害が出ました。子供たちは教職員と地域の方の迅速な対応で、幸いにも全員助かりましたが、残念ながら、地域の方の貴い命が奪われてしまいました。

大震災翌日に六郷地区に避難し、避難所生活が始まりました。今後の生活のめども立たず、暗く悲しい、不安な日々が続きました。そんな中でも地域の皆様は、復興に向けて大きな一歩を歩み出しました。その中には教育再開に向けて関係機関等への働き掛けがありました。また、六郷中学校の諸先生方が環境整備をしてくださったおかげで、新たに授業を再開することができました。

学校教育は再開できましたが、全国各地から励ましの訪問が続きました。子供たちが元気になるために、笑顔を取り戻すために必要なことと思い、スケジュール調整に尽力しました。

学校教育の復興の第一は、通常の学校生活を送ることだと考えます。被災校だからといって、学力テストや体力テストが免除されることはありません。教科書を使った学習だけでなく、修学旅行や野外活動、日常的な当番活動や委員会活動など、当たり前の活動がなされてこそ復興だと言えます。

また、子供たちの目に見えない「心のケア」と、保護者の「心のケア」を同時に行うためには、教職員が心身共に健康だからこそ対応できると考え、教職員との関係づくりが大切だと思いました。

そこで、教職員が学校にいる間は、少なくとも明るく元気に過ごせるようにと、どんなことでも話し合える明るい雰囲気づくりに努めました。教職員は、子供たちだけでなく、保護者や地域の方とも明るく接してくれました。

平成25年度末に、東六郷に「六郷固有種のメダカ」がいることが分かり、メダカの飼育を通して学ぶ「ふるさと教育」に平成26年度から校内研究として取り組みました。大震災後、東六郷の自然環境はどのように変わったのか、田畑で農業は再開できているのか、伝わっている郷土芸能はあるのかなど、地域を調べているうちに、東六郷のすばらしさが子供たちにも分かってきました。在籍児童8名が被災した本校での学校生活の体験がなかったので、失われたふるさと、失われつつあるふるさとのよさを伝えることで、これからもふるさとを誇りに思い、力強く生きていけると思いました。

また、子供たちには、大震災当時のことを自分の言葉で語れるように、そして、温かいたくさんの支援に対する感謝の思いを、成長過程の中で行動に表せる人にならしましょう、と話しています。

大震災が発生しなければ、自然豊かな環境と、学校に対する温かい地域の協力が、大きな魅力だった東六郷小学校。大変残念ながら、四つの町内会のうち、二つの町内会が解散するという状況になり、児童数も大きく減り、平成29年3月末をもって閉校し、翌4月1日から六郷小学校に統合されることが決まりました。

この現実をしっかりと受け止め、未来に向かって大きく踏み出さなければなりません。中学校に進学しても、六郷小学校と統合しても、自分を見失うことなく、自信と誇りを持って、しっかりと歩み出す児童に育てなければいけないと考えています。

新しいふるさとの未来を作り出せるように。

校歌の最後にあるように、「東六郷 栄あれ」

座 談 会

仙台自分づくり教育の推進

●と き 平成28年10月11日(火)

●ところ 仙台市教育センター

【挨拶】成田会長 本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。



若年層の離職率の増加や、職業観の違いによるフリーター、ニートの増加が問題になっています。このような中、「子どもたちが生きる力を身に付け、主体的に自己の生き方を選択・決定して、将来の社会人・職業人として自立できるようする」という目的でキャリア教育が始まりました。仙台市では、早々と「仙台自分づくり教育」という考え方を打ち出し、既に10年余りが経過しました。当初より学力の向上と相まって、学力の向こうにある生き方教育を目指すという理念を掲げていたことは皆様も御承知のことと思います。

小学校から高等学校までの発達段階に応じて、そのつながりを考えながら学校教育全体、そして、家庭・地域を挙げて、この生き方教育の仙台版である自分づくり教育を展開しているわけですが、当初は中学校の職場体験が中心でした。小学校では、そのための土台作りを担っていくと示されておりました。

ただ、昨今、いじめや不登校のことが問題となり、子供たちを取り巻く環境も大きく変化しております。子供たちに求められる生きる上で必要な「知恵や態度」のようなものが、学校の中で身に付けることがなかなか難しくなってきました。さらに、コミュニケーション能力や自己肯定感が低下していることもあり、今こそ、小学校でこの自分づくり教育の推進が強く求められるところです。

本日は学びの連携推進室から佐藤室長にもお越しいただいております。ありがとうございます。これから有意義な話合いができますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

今野広報部長 御参会の皆様、こんにちは。本日は御多用のところ、座談会に御出席いただき、誠にありがとうございます。

仙台市小学校長会・広報部では、今年度も「復興に向けた新たな取組を通し、未来を切り開き、たく

ましく生きる子供を育てる学校経営」というテーマで会報『廣瀬川』の編集を進めております。

今回の座談会では、子供たちが自ら学ぶ意欲を持ち、人や社会との関わりを大切にしながら、将来の社会的・職業的自立に必要な態度や能力を育むために推進しております仙台版キャリア教育であります「仙台自分づくり教育」を取り上げ、昨年度から全ての小学校で実施している「子ども体験プラザのチューデントシティでの学習」の取組、あるいは、各学校において実践されている「仙台自分づくり教育」の内容を確認しながら、取組の成果や課題等を明らかにしていくとともに、「未来を切り開き、たくましく生きる子供を育てる学校経営」を校長としてどのように具現化していくのかということについて、皆様方のお話から考えてまいりたいと存じます。

そこで、「たくましく生きる力育成プログラム（通称：たく生き）」を実践している吉成小学校、学区内の商店の御協力をいただき、起業家教育に取り組んでいる荒巻小学校、体力向上と関連させた自分づくり教育に取り組んでいる南光台東小学校、地元の企業での職業体験活動に取り組んでいる東宮城野小学校の校長先生方に御出席をいただきました。また、校長会を代表しまして、成田会長に、さらに、「仙台自分づくり教育」の推進についていつも御指導をいただいております、仙台市教育局学校教育部学びの連携推進室佐藤淳一室長にも御出席をいただきました。

子供たちの未来につながる教育について、それぞれの思いを語っていただくとともに、これまでの実践について御紹介いただき、今後、私たちが取り組んでいくための指針にしたいと思います。



本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本市が目指す仙台自分づくり教育

司会（廣瀬） まず始めに、本市が目指す仙台自

<出席者>

佐藤 淳一

(仙台市教育委員会
学びの連携推進室長)

成田 忠雄

(仙台市小学校長会長
仙台市立片平小学校長)

小熊 信治

(仙台市立荒巻小学校長)

中林 和雄

(仙台市立東宮城野小学校長)

鈴木 勉

(仙台市立吉成小学校長)

石田 裕子

(仙台市立南光台東小学校長)

今野 克則

(仙台市小学校長会広報部長
仙台市立櫛岡小学校長)司会
廣瀬 清文(仙台市小学校長会広報部
仙台市立生田小学校長)

分づくり教育について、仙台市教育委員会学びの連携推進室佐藤淳一室長にお話をいただきたいと思えます。仙台市の教育振興基本計画に示された理念と「杜の都の学校教育」に示された重点事項も含めまして「仙台自分づくり教育」のねらい、現状、目指したいものなどについてお話を頂戴したいと思えます。お願いいたします。

佐藤室長 それでは私の方からは、「仙台自分づくり教育」のこれまでの経緯等を含めてお話しさせていただきます。



キャリア教育という言葉が文科省で最初に使われ始めたのが平成11年の中教審からです。その後いろいろと社会情勢その他を含めて、更にこのキャリア教育が重要視されるようになってきたのは、先ほど成田校長先生からもお話があったところです。

本市では、平成17年度に寺岡中学校が職場体験活動のモデル校としてまずスタートをいたします。平成18年度には、「仙台自分づくり教育」を策定し、更に平成20年度に仙台市学校教育指針の最重点事項に位置付けまして推進を図ってきたところです。そして、平成21年度には、職場体験活動が、全ての中学校で実施となりました。その後、大震災がありまして、平成23年度、その傷付いた子供たちの心を少しでも癒やし、将来に向けて明るい夢が持てるようにということで「夢教室」を始めます。この「夢教室」も、今では90校を越える学校が実施していますし、それ以外でも職業講話という形で、各学校で取り組んでいただいております。平成25年3月には、100のプランを掲載した「たく生き」授業プラン集が完成し、本格的な実践が始まりました。そして8月には、震災からの復興支援を受け、仙台子ども体験プラザ事業が開始します。小学校が学習するスチューデントシティが昨年度全市展開、中学校のファイナンスパークが今年度全市展開ということになります。また、今年は職場体験活動でこれまでお世話になった方々への感謝と広報ということも含めて「仙台自分づくり教育アワード」を8月2日に開

催しております。このように当初は職場体験活動を核とした形で自分づくり教育をスタートし、展開してきましたが、その後、様々な事業が拡充されてきたという経緯がございます。それを受けまして「杜の都の学校教育」に「自分づくり教育全体像」を示しておりますが、今後、それらがより系統的に有効的に展開されるよう、それぞれがどのように関連しているのかという構造的なものを示していきたいと考えているところです。

先ほど仙台市の教育振興基本計画のお話もございましたが、実は今、第2期の教育振興計画の検討に入っているところです。今日はその資料をお持ちしました(資料配布)。現行の教育振興基本計画と大きな項立てのところは変わっておりませんが、中身の文言と示し方は若干の変更があります。第3章目指す仙台の教育の姿、1の「育みたい市民の力」にあります「今後10年間で育む必要な力として第1期計画で掲げた『時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力』は、今後の社会においても変わらず必要となる大事な力であることから、更に育んでいくため、第2期計画でもこれを継承する」としてありますので、この理念は、今後5年も継続されていくということになります。その源となるのは、「一人一人が自分自身を認め、主体的に学び、考え、行動し、人や社会とのつながりの中で生きていく力である」とし、「自らを認め自らを信じる力」等の四つの力を育むことが、重要であるとしております。

次の指導要領の審議のまとめが8月に出まして、校長先生方もお読みになったと思いますが、今後、子供たちの65%が、将来、今はない仕事に就くだろうという話とかIT化がどんどん進んで10年～20年後には半数近くが自動化されるであろうこととかが掲載されています。要するに予測困難な時代を生きていく子供たちに、私たちがどのような形で社会的自立を促していくのか、職業的自立を育んでいくのかが問われていることになると思われます。そういった意味でも、本市ではこの自分づくり教育というものを一つの核にしながら、そういった子供たちが主体的に将来の生き方を自ら考えていくという本当の学びをいかに作っていくかということが重要だと考えています。特に本市の自分づくり教育の場合、

職業的自立に必要な態度や能力を育むという国のキャリア教育の視点に加え、生き方教育であるとし、ねらいの前段に入っている「児童生徒が自ら学ぶ意欲を持ち、人や社会との関わりを大切にしながら」というものを前面に出してこの仙台版キャリア教育を行っているのが一つの特色とっております。学習意欲につながる面と人や社会との関わり、そういったことと結び付けながら自分の将来を考えていくというのが本市の自分づくり教育の特徴でございます。

今日は、各学校の取組事例を紹介していただくので、私も大変参考にさせていただきたいと思っております。簡単ではございますが、本市の自分づくり教育についての説明とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

スチューデントシティにおける 各校の取組状況と成果

司会（廣瀬） ただ今、佐藤室長から、次期教育振興基本計画の話を含めまして、本市が目指す仙台自分づくり教育についてお話いただきました。それでは先ほど今野部長のお話にありましたが、本市の施策の一つでもありますスチューデントシティの学習が昨年度から全小学校での実施となりました。

そこで、各学校の取組状況や子供の変容について、お話させていただきたいと思います。

なお、スチューデントシティでの学習を実施するにあたって、自校の指導計画等を見直した部分があれば、その点についても触れていただければと思います。

小熊校長 昨年度、初めて5年生46名がスチューデントシティでの学習に参加しました。

荒巻小では、昨年度より、2年生の町探検を生かした高学年の起業家教育を行っています。2年生の町探検では、学区内にある様々なお店などに行き、そこで見たもの、聞いたものをもとに、グループごとまとめをして発表し合う学習をします。その際、様々なお店や郵便局などの御協力をいただいて学習を進めるわけですが、そこでお世話になっているお店などを応援する活動ができないかということで、高学年の活動が組まれています。日頃から実際の世の中に関わる学習を行っていたことで、スチューデントシティでの学習に、スムーズに取り組むことができたと思っています。

当日は、片平丁小学校の5年生と一緒に活動しました。子供たちは、学校での事前学習で「仕事をする意味」や「価格やコストと利益の関係」などをしっかり学んでスチューデントシティでの学習に臨み、

仙台市役所、銀行、運輸会社などの企業に所属して活動しました。

活動は、話し合いと実践の3段階のユニットに分かれていて、その時の状況に応じて、会社の中で話し合いをして、決断し実践するというものでした。初めて会う片平丁小学校の児童と一緒に活動ということもあったのかもしれませんが、子供たちは、初めは恥ずかしそうに、ちょっと自信なさげに活動していました。しかし、時間が進むにつれて、自分たちの会社の売り上げなどの状況を理解し、真剣に考え話し合い、活動していきました。その学習の流れは、子供たちの発達段階に合わせた、よく練られた学習プログラムだと思いました。

また、他校の児童と一緒にいうのもよかったことで、初めて会った人たちと力を合わせて仕事をすることは、子供たちのコミュニケーション能力を高めることにつながったと思います。

スチューデントシティでの学習と起業家教育の学習を両方終えて、校内の運営反省会では、地域での起業家教育を終えた後にスチューデントシティでの学習に取り組んだ方が、自分づくり教育のまとめになるのではないかという意見が出ており、荒巻小では、今後、6年生の活動へ変更する予定です。

中林校長 東宮城野小学校では、4年生の段階で学区内の卸町の商店や企業で半日の職場体験を行っています。5年生での仙台子ども体験プラザ（スチューデントシティ）は、それを踏まえての学習になります。

4年生の職場体験について簡単にお話ししますと、子供たちが3～5人のグループで体験させてもらえる商店や企業に行き、仕事の一部をお手伝いする体験です。たとえば、お茶屋さんでは、お茶の取り扱い方や重さを量っての袋詰め、文房具店では納品された品物を店舗に並べる仕事、レンタル店では品物の管理の仕方などです。このように、その店で小学生ができることで、その店ならではの体験をさせていただいています。

本当の店や企業で、本物の体験をさせてもらえることに意義があり、4年生の子供たちが半日体験している時の姿は真剣そのものでした。一緒についていったボランティアの保護者の方も、子供にとってもいい経験になるということをお話されていました。

このような職場体験により、子供たちは、お店や企業には、いろいろな役割の人が働いていて、それぞれがしっかり決められたルールに基づいて仕事をしていること、それによって店や企業が運営されていることを感じることができています。

一つの職場に3人～5人なので、仕事の内容が分

かり自分の役割が分かり仕事をすることができます。東宮城野小学校では、4年生でのこのような体験をすることによって、5年生のスチューデントシティの学習がより発展的なものとなって、子供たちにとってスムーズにつなげていくことができると考えています。

4年生の段階での職場体験は、本物の仕事に触れることはできましたが、あくまでもお手伝いということが主でした。5年生のスチューデントシティでは、実際に企業としての収入、支出、利益を扱うので戸惑いはあったと思います。

しかし、昨年度のスチューデントシティの体験では、自分がすべき仕事分かり、信頼されて仕事を任せられることにより、意欲的に仕事に取り組む姿が見られました。

また、本校は小規模校なので、他の学校と一緒に取り組むことになりました。一緒に活動することに心配していましたが、企業やお店の目標達成のために、他校の児童と協力して活動できたことは、大きな成果の一つでした。

この他校の児童と協力して活動することは、4年生の時の職場体験では、体験できなかったことであり、本校の児童にとっては貴重な体験でした。また、仕事は、お金を得るためのものでなく、人を助けたり人のためになったりするのであることを感じる事ができたこと、また、自分が希望する職種や役職でなくても、それぞれに楽しさややりがいがあることを学んでいました。とてもいい経験となったスチューデントシティでした。

石田校長 本校では5年生が総合的な学習の時間



で実施しています。昨年度は吉成小学校さんと一緒に12月に参加してまいりました。学習プログラムの15時間のみの学習でしたが、今年度は、その前後に付け足して30時間扱いとしております。事前の学習では、求職票作成の後に校長がグループ面接を行い、礼儀や正しい言葉遣いの練習、そして、自分の思いや考えを相手に伝える学びの場としたいと考えています。また、事後の学習においては、各自が学んだことを来年参加予定の4年生向けのリーフレットにし、発表する予定です。

事前学習の内容は専門用語もあるため、指導をする上で担任は不安を抱いていましたが、子供たちはこの体験活動に非常に興味を示し、意欲的に取り組んでいました。ただ、どうしても市役所や警備会社、通信などの仕事は説明だけでは分からない部分が多く、子供たちの希望をとると、やはりコンビニや商

品販売などの子供たちの生活になじみのある職種に集中し、調整に時間がかかってしまいました。子供たちにとって有意義な体験となったのは、求職票の作成です。実際に自分が希望する仕事に就けるかどうかに関わるリアルな経験です。今の自分を見つめ、将来に対する自分の思いに気付く、そして更に自分の意志で選択や決定をしなければならないという作業であるため、子供たちは緊張感を持って取り組んでいました。

当日は、時間がたつとともに子供たちの変容が見られました。午前中は涙ぐんだり固まったりする子供もいましたが、午後には、自信を持って接客をしたり、また、社内会議で堂々と自分の意見を述べたりする姿が見られ、担任が非常に驚いていました。実施後は、帰宅して自分が体験したことを家族に詳細に話したようです。そして、親の仕事に関心を持って「どんな仕事なの」と聞いたり、職場を見に行きたいと言ったりする子供もいたようです。子供たちにとって、これまでにない緊張感、そして、自分を変えざるをえない状況を体験できたことはとてもよかったと思います。

保護者ボランティアについては、共働きの家庭が多いので、集まるかどうか不安に思っていたのですが、実際には、予想以上に希望者が多く、半分はお断りをする事態となりました。保護者のこの活動への興味関心がこんなに高かったのかと驚いたところです。ボランティアをした保護者の感想は、キッザニアのようなイメージを持っていたけれども全く違っていた、単なる職場体験ではなく、一市民として働くことを通して社会や経済の仕組みを学ぶことができる貴重な体験だというものでした。また、子供扱いしない企業の方々の厳しい姿勢がとてもよかったという声も多くありました。

この体験後、親の仕事や税金などについて聞かれるようになった家庭も多かったようです。保護者は、自分も社会の一員として自覚と責任を持って、我が子にその姿勢を見せることが大切であるという意識を改めて持つようになったようです。また、これをきっかけにボランティアに登録した方も数名おりました。

鈴木校長 先月29日に岩切小学校さんと合同で、5年生74名が、スチューデントシティに参加してきました。

本校では、このスチューデントシティを5学年の自分づくり教育の核をなすものと位置付け、総合的な学習の時間70時間のうち30時間をこのスチューデントシティに当てております。学習プログラムでは、事前・事後を含めて15時間の内容で扱っていますが、終了後に更に15時間、スチューデントシティを模造

紙やポスターにまとめて、4年生に紹介する活動を取り入れております。これは、本校で重点としている自分づくり教育の「みつめる力」と「かかわる力」を高めることをねらいとしています。

学習プログラムの事前指導には、「たく生き」の授業や学年集会などを計画的に組み入れております。例えば、学習プログラムの2時間目を終了した後に、面接を行って、所属の会社を決定するという内容を盛り込んでいます。また、総合単元的に「たく生き」の授業を事前指導に3時間組み入れていることです。「かかわる力」の2時間（人間コピー、話の聞き方と話の伝え方）と「いかす力」の1時間（視点を変えて書いてみよう）の計3時間を事前指導の合間に組み込んでいます。

事前指導では、児童用ワークブックのほかに、買い物ごっこや遊び感覚に陥らないように、言葉遣いや社会人として必要とされるマナーについても指導していました。児童の様子からは、「早く実践したい」という意欲の高まりが見られ、スチューデントシティへの期待感とそれに向けた心構えや態度を養うことができたと思います。働く会社を面接で決定するというのも、より現実社会に近い形ですので、子供たちも緊張感を持って臨んでおりました。また、それを志望した自分の考えをしっかりと持つことができたように思います。

当日の取組状況ですが、企業の皆さんからは、責任ある一市民・一社会人として対応していただいたことで、学校では味わえない緊張を感じていたようです。第1ピリオドではたどたどしい仕事ぶりでしたが、社内会議を通して、挨拶の指導や声の大きさ、接客態度、時間を守ることなどをストレートに指導いただいたことで、第3ピリオドでは、自分から自主的に動き、声にも自信が感じられる様子が見られました。大変よい刺激で、仕事を終えた時は達成感や満足感を味わっておりました。

成果と変容についてですが、子供たちは、仕事の厳しさ、大変さを感じることができたようです。また、協力、チームワークが大事であること、自分の役割を精一杯にやり遂げることの大切さを学んだようです。

担任からは、社会科の学習で、利益、コストなどの用語がすんなり子供たちに入って、理解が深まったこと、自分の仕事を、責任を持って果たそうとする気持ちが強くなったり、「仕事をするのは楽しい」という考えを持ったりする児童が多く、自分の将来を肯定的にイメージする児童が増えたという話を聞くことができました。

当日、岩切小さんと合同で体験できたのも、ほどよい緊張感を持って交流することができ、大変よかったと思っています。

現在は、4年生への活動報告会に向けて、発表原稿やポスター資料を作成するなどして、学習の振り返りを行っているところです。

各校の特色を生かした 仙台自分づくり教育の展開

司会（廣瀬） ここからは、各学校の実情を踏まえた各学校独自の仙台自分づくり教育の推進に向けて取り組まれている内容、成果や課題などについて、具体的にお話いただきたいと思います。

石田校長 自分の経験を考えても、人との出会いで、考え方が変わったり世界が広がったりしてきました。本校は一小一中ということもあり、9年間で出会える人はそれほど多くありません。子供たちには、様々な人との出会いの場を与え、いかに生きるかを考えさせたいと思いました。

昨年度は、世界で活動するヴァイオリンの演奏家、実業団の女子駅伝チーム、元体操日本代表選手においでいただきました。今年度は、仙台国際音楽コンクールに出場した若手の演奏家、女子野球チーム、女流棋士、青空応援団、南極観測隊員の方をお呼びしました。また、今後は、ガーナのカカオ豆作りに関わる会社を起業した人や感染症対策に携わった医師の講話を予定しています。内容によって、対象学年は違いますが、高学年は、全て実施しています。一流の演奏を聴いたり、直接、実技指導を受けたり、南極の話を知ったり、疑似体験をしたりしました。質問コーナーでは、学年を問わず、その道を目指した理由や大変だったことなどの質問が多く出ます。目標に向かって努力し続ける人や本気で何かに取り組む人の生き方は、やはり子供たちを引き付ける魅力があるものだと感じております。

青空応援団の姿に刺激を受けた5年生は、陸上記録会の壮行会で、本校オリジナルの力強い真剣な応援を披露し、今後本校の応援スタイルとして継続していくことになりました。また、リズム体操の指導を受けたことをきっかけに、教員も刺激を受けました。教員プロジェクトチームを作り、ダンスの要素を取り入れた「東っ子リズム体操」を作り、今年度から、運動会や年間17回実施している朝の体育活動、そして、体育の学習で活用しています。

本校の児童は、素直で優しく真面目というよさがある一方で、物事に向かう勢いやエネルギーがやや乏しいように感じています。そのため粘り強さやたくましさに欠けるという課題がありました。本校の学区は一小一中ですので、これは、小中共通の課題でもあります。健康・体力は、様々な資質や能力を支える基礎となるものだと思います。そこで、小

中連携で積極的に体力向上に取り組み、たくましい体づくりを目指すとともに、チャレンジ精神や粘り強さを養いたいと考えました。

今年度の協働型学校評価の重点目標を「体力向上・健康増進」とし、自分づくり教育の取組と関連させました。地域には、体育振興会のほかに総合型地域スポーツクラブ「エンジョイ倶楽部」というものがあり、青少年の健全育成や心身ともに健康なまちづくりを目指しています。今年度は、学校も役員として企画運営に関わり、体育の学習やクラブ活動への支援、放課後や休日のスポーツ活動の実施、そして今はスポーツ少年団の設立に向かっていくところです。児童の体力向上・健康増進について、支援や協力を得ることができています。地域は、学校で身に付けた「かかわる力」や「みつめる力」などを試す絶好の場だと思います。連携しながら、指導改善に努めていきたいと思っています。

展開に当たっては工夫を図る必要がありますが、講師を招き、その人にしか語れない話を聞くことができる特設学習は、何かしたいというエネルギーが湧いてきます。それは心の活力の向上に大変有効であると思っています。生き方に関わる学習は、教師の温度がそのまま反映されてしまうので、教師と子供が同じ思いを持つことが、指導の効果を左右するのだと思います。そこで感じたことや考えたこと、心に決めたことを、これからの自分の生活に生かしていこうとする実践的態度につなげるために、学習の組立てを工夫しているところです。計画になかった特設の学習を実施することもあります。実施できる機会に恵まれ、ねらいが明確で子供のためによいものであれば、変更や追加を随時行っています。その場合、自分づくり教育は学校全体として考えるべきものなので、対象学年等については部会で検討をしています。また逆に、実施したいと思っても経費の問題から、どうしても諦めざるをえないものもあり、残念な思いをしたこともありました。

鈴木校長 まず、本校が「たく生き」に取り組んだきっかけは、「学びの連携」のモデル事業校ということで平成23年度から5か年間、吉成中学校区で指定を受けたことです。自己肯定感の低い児童が少なくないといった児童の実態もありましたので、平成24年度から校内研究を核として、市教委で推奨している「たくましく生きる力育成プログラム」を活用しての授業づくりに取り組み、今に至っております。

具体的な取組としましては、この「たく生きプログラム」を校内研究に位置付けて取り組んできてお



ります。吉成中と連携して、9年間で育む子ども像を「物事や考え方の多様性を理解し、他者とのかかわりの中で成長できる子供」として、各学年段階での自分づくり教育の目標を定め、授業研究を中心に実践してまいりました。内容としては、三つの視点を設定して取り組んでおります。視点1は、自己肯定感を高める授業づくり、視点2は、友達に自分から進んで関わろうとする授業づくり、視点3は、学級での自分の所属感を高めさせるための授業づくりの工夫です。

年度当初に、学級の実態をもとに、学年部ごとに「育てたい力」を確認し、「たく生き授業プラン集」を活用して、年間指導計画に組み入れています。指導計画の位置付けは、主に学級活動が多いのですが、その手法を生活科や総合的な学習の時間に取り入れて、温かく友達と関わり合う子供の育成を目指す取組をしています。「たくましく生きる力」は、御存じのように「かかわる力」「いかす力」「みとおす力」「みつめる力」「うごく力」の五つの力があります。本校で、特に重視している力は、自他のよさを認め、コミュニケーションの力を高める「かかわる力」と、自己肯定感のアップを目指す「みつめる力」の二つです。プラン集には、それぞれの力の指導案がありますので、それを実態に合わせてアレンジし、朱書きを入れるなどして次年度に生かすようにしています。

先ほどもお話ししましたように、「たく生き」の授業を校内研究の柱としていますので、学年部での授業研究でもみ、全校対象の授業研究では、ワークショップで自由に発言し合い、よりよい授業の在り方を探っております。また、年に1回ですが、小中が互いに授業を参観し合ったり、分科会で意見の交換をしたりもしています。

子供の変容、成果と課題ですが、本校の成果の指標として、仙台市標準学力・学習状況調査から、「自分にはよいところがあると思う」の自己肯定感に関する項目について、5年間の経年変化をグラフ化し、仙台市の平均と比較しています。これを見ると、ほとんどの学年が、中学校に入学してからも自己肯定感の割合が下がっていないという結果が得られています。自己肯定感の高まりは、自分の自信につながっていきます。この手応えから、今後も、基本的に学活の年間指導計画に位置付けて継続実施して行く予定です。もちろん、「たく生き」だけで、自己肯定感や他者とのコミュニケーション能力を高めていけるものではありません。全教育活動の中で、たく生きの手法を意識した指導が大切になってくると思います。

現在、子供たちには、「たく生き」の授業が好評で、「たく生き」の授業が楽しいと回答している児

童が、昨年度末で91%でした。答えは一つではなく、いろいろな考え方があるのだというところ、また、教師も子供たちも、相手の考えを認めて、受け入れようとする雰囲気ができていることにあると思っています。

課題として、「たく生き」の効果を広く保護者や地域に理解してもらい、特に家庭でも話題にもらったり、意図的に褒めてもらったりしながら、連携して取り組んでいけたらと思っています。

今年度は、保護者や地域に、各学級年間 3 回の「たく生き」の授業公開を行っております。今後とも、たくましく生きる力や確かな学力の育成など、義務教育 9 年間を通した連続性のある学びを進め、負担の少ない形で小中の円滑な接続を図っていくこと、そして、学校・家庭・地域が一体となって児童生徒が学ぶ環境をつくっていく必要があると思います。

また、「たく生き」は、望ましい学級経営に向けての一つの手段でもあると思います。本校でも、20代の先生と50代の先生に偏り、年齢層のアンバランス化が進んでいます。あの先生だからできるではないけれど、だれでもできるたく生きプログラムを活用し、OJTの推進に努めていく必要があると感じています。幸いにも、開放的な職員室の雰囲気がありますので、若い世代の教員が、先輩の授業を見て、温かい学級づくりにつながる授業力を身に付けていってほしいと思っています。

中林校長 本校では、平成16年度より「へえへえウォーキング」という4年生の職場体験活動を総合的な学習の時間「自分づくり教育」の一環として行っています。学区内の卸町の企業・商店の皆様の御理解と御協力により、半日間子供たちは、企業やお店



で職場（仕事）の体験をさせてもらっています。ほとんどの児童にとって、職場体験は、初めてであり、本当の仕事の苦労や大変さを知るとともに、大人に混じって仕事ができる喜びを味わうことができます。また、働きながら、将来働くときに向けてどんな力を身に付けておいたらよいのか、どんなことが大切なのかなどを、働いている人から直接聞くことができます。半日の職場体験をした子供たちの顔は、みな充実した顔をしています。

後日この職場体験したことをまとめ、企業や商店の方々の前で、今回の職場体験でどんなことを学んだかを発表します。半日の体験ではありますが、子供たちにとっては、貴重な体験であり、まとめまでしっかりとできることに意義があります。そしてこ

の4年生の職場体験「へえへえウォーキング」の活動が、5年生のスチューデントシティにつながっていきます。

はじめにもお話ししましたが、この職場体験は、卸町の皆様の御協力により成り立っている活動で、本校が卸町の学区であることを生かした活動です。卸町の方々には、4年生だけではなく2年生のまち探検でも御協力いただいています。

東宮城野小学校は、全校児童が180名ほどの小規模校ですが、それを生かした自分づくり教育ができればと考えています。本校には、「あけぼの太鼓」という太鼓の演奏があります。6年生になるとあけぼの太鼓（全4曲）をマスターして演奏します。最初の発表の機会は、卸町夏祭りのステージです。次が学習発表会、そして今年は、宮城野区民祭りでも発表します。6年生全員がステージで発表することで達成感と一体感を味わうことができ、一人一人の子供にとって、やり遂げた自信にもなります。6年生の最後には、5年生に「あけぼの太鼓」を伝える活動も行っています。

また、6年生は人数が少ないことから、誰もがリーダーとしての役割を体験して、そこで成長していきます。クラブ、委員会のリーダーやたてわり班の班長になり、6年生一人一人が下学年の前に立ち、話をしたり指示を出したりできる機会があります。子供たちにとっては、かなりの緊張でプレッシャーもありますが、担当の教諭の支援の下で、みんながリーダーとして頑張ることができています。

先日、6年生になって東宮城野小に転校してきたお子さんの保護者の方とお会いしたときに、5年生までは大きな学校であり目立たない子だったが、東宮城野小にきて、自主的な取組や活動をする機会が多くなり、とても生き生きと学校に行っていますというお話をいただきました。太鼓やリーダー経験など一人一人が活躍する場があることが、子供の成長にとって、自分づくり教育には必要なのだと改めて感じました。

最後に、昨年度の特別な取組を紹介します。昨年度東宮城野小の6年生に在籍していた張本智和君のことです。張本君は、小学校1年生から6年生まで卓球で全て日本一になり、全日本選手権に小学生で出場して、高校生や大学生、社会人にも勝って、大会で大活躍して日本中から注目を浴びた卓球のスーパー小学生でした。その張本君が卒業を前に、卓球の技のすごさとともに、どんな気持ちで今まで卓球と向き合ってきたのかを全校児童に話してもらうことにしました。

張本君は、夢や目標を持つことの大切さとそれに向かって努力しなければならないことを全校の前で分かるように話してくれました。彼は小学1年生か

ら継続して努力をして、よい成績を残してきました。将来オリンピックを目指している張本君の言葉には、重みと納得のいくものがあった、全校児童の心に響くものでした。

小熊校長 転任して思い出したことなのですが、私が過去に柳生小で起業家教育を行い、その後、他の小学校でも実践され、荒巻小学校も市教委から「起業家教育実践推進校」として指定され起業家教育を行っていたという歴史がありました。そのような縁があったからか、昨年5月に、東北経済産業局から「経済産業省が新年度になって起業家教育モデルプログラムの公募をすることになった」という情報をいただきました。

急な話ではあったのですが、仙台市内数校の小学校で実践された起業家教育が、キャリア教育と統合され、「仙台自分づくり教育」へと発展したことや、起業家教育は問題解決的な学習で、チャレンジ精神等を育てるのに最適な学習であることなどを、高学年担任に伝え話し合いました。他校で総合の研究を一生懸命にやってきて転入してきた教員がいたこともあり、「総合の内容を変更して、新たに教材開発しながら起業家教育に取り組んでみましょう」ということになりました。

先生方もチャレンジ精神旺盛だったのです。校内での調整をして、学校として応募したところ、全国で七つ、東北では唯一の実施団体に選定されることになりました。必要な活動資金額を申請し、認められれば交付される制度でしたが、少し控えめに申請して、約60万円の活動資金が認められ、その後の学習を大胆に進めることができました。

学習の進め方としては、つながりのある学習を目指しました。「情報を集める」→「課題を見つける」→「整理する・分析する」→「まとめる・表現する」という流れの中で、感じた疑問や問題点をまた新たな課題にするというサイクルを意識して行いました。自らが課題を見付け、解決するために活動することで「もっとやってみたい」「次は〇〇してみよう」と、意欲や関心を引き出すことをねらいました。

実際の学習では、最初に子供たちに、荒巻は、仙台市中心部に近い位置でありながら、人口や児童数が減少していること、二つあった商店街が、大手スーパーの進出、後継者不足などから衰退していること、バス通りは賑やかなものの地区の高齢化が進んでいることなどを伝えました。

子供たちからは、「荒巻をもっと元気にしたい。荒巻のいいところを知ってほしい。自分たちができることをしよう。」という声が上がりました。全学年の保護者の協力を得て、荒巻地区に関する意識調査のアンケートも行いました。

それらの結果を受けて、教師と子供たちで更に話し合いを進めたところ、5年生は商店の取材をしてその商店のよさを伝えるポスターを作る活動、6年生は、荒巻を元気にするキャラクターを考え、松川だるま店で焼いていただいた土鈴にデザインして商店に贈る活動を、「荒巻元気アップ作戦」として二つの学年で実施することにしました。

活動に当たっては、両学年とも、在仙のプロのデザイナー、コピーライター、アートディレクターに指導をお願いしました。プロの方々からは、「誰に告げるか、何を告げるか」「いいキャッチコピーは世の中にいい影響を与える」「正しい情報をより魅力的に」など第一線で活躍されていて感じていることを、子供たちに伝えていただきました。子供たちは、伝えたい相手を思い浮かべながら簡潔に伝えることを学び、それぞれの製作活動の中で生かしていました。

5年生は、取材活動を通して、そのお店のよさ、お客さんに対する思い、仕事に対する考え方、活性化を願う心等を一生懸命取材しました。そして、撮ってきた写真とコピー（言葉）のバランスに苦慮しながら、ポスターを完成させていきました。

6年生は、地域のお店への感謝と今後の発展を願って、土鈴のデザインを考えました。「荒巻らしさとは何だろう」と話し合い、何種類ものデザインを考え、絞り込む作業を通して、考えたものを表現して、相手に伝える難しさを感じました。

これらの学習を通して、子供たちは、「チャレンジしたときはドキドキしましたが、ワクワクもありました。何でもチャレンジしてみようと思うようになりました。」と感想を述べているように、チャレンジする力や考える力・伝える力等が育ったように思います。

「未来を切り開きたくましく生きる 子供を育てる学校経営」への思い

司会（廣瀬）

最後に、仙台市教育委員会から、



今後の仙台自分づくり教育を推進していくに当たり、これからの課題、また、学校運営について校長に期待することを、佐藤室長からお話いただき、その後、仙台自分づくり教育をこれから推進していくに当たって課題と感じていることを踏まえ、「未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」について、校長としての思いをお一人ずつお話いただきたいと思います。

佐藤室長 市教委の考え方というよりも、あくまでも私自身の思いなのですが、被災した当時、校長として勤めていた頃、キャリア教育の一層の推進がうたわれていました。地域がほぼ壊滅して、避難所にいる大人の方々も含めて、明日をどう生きるかさえも見通すことができないような状況にいた時に、私は「子供たちに夢を持て、未来を語れ」とはとても言えませんでした。

ただ、徐々に徐々に少しずつ少しずつ生活が戻ってきた中で、家を失い、中には肉親を失い、地域を失った子供たち、この子供たちにこそ、これからどんな仕事に就き、どう生きていくのか、しっかり考える場と時間が、体験を含めて必要だと私は強い実感を伴って認識を持ちました。

被災については、仙台市においても、沿岸部と内陸部では、また違った様々な捉えがあったと思います。しかし、御存じのとおり、震災後、本市では、自己肯定感が下がったままという状態が5年間も続いてきたわけです。やはり震災が何らかの影を落としていると考えざるを得ないと思っています。

ところが今年度、新たな動きが見え始めました。先程来の「たく生き」の話の中でも、自己肯定感の話が出てきておりましたが、生活・学習状況調査において「自分には、よいところがあると思う」の結果が、今年度、震災後初めて動いたんですね。これまでずっと下がったまま戻らなかった数値が回復の方向にです。中学校1年生と3年生においては震災前を超えました。これに伴って、この調査の継続的調査事項の多くの項目で良い結果が出ました。

昨年度、自死事案があって、様々な機会の中で、学校関係者もそうですし、地域の方、それから御家庭の方々も、強い危機意識を持って対応する中で、多くの場面で子供たちを認めたり、人間関係を大切にしたりする様々な取組や関わりを通して、結果として、このような向上につながったものとも推測されます。

私が重要だと思うのは、この動きを一過性のものにはしないということです。昨年度こういうことがあってみんなで取り組んでこういう結果が出た。それはそれで、私は評価したいと思います。このことを今年度だけではなく、これをしっかりと継続的なものしていくということが、まずは、一つあるのかなと思っています。

一方、自分づくり教育についての質問の一つ「自分の将来を考えると、楽しい気持ちになる」が、震災後下がったままでいまだ回復していません。将来に対する不透明感とか、急激に変化する社会情勢も反映していると思うのですが、ただ、こういう結果があると、やはりいろいろと考えてしまいます。震災によって累々と大人が積み上げてきたものが、あ

の時、一瞬にして瓦れきと化した。実際にその場にいた子がいるわけですし、少なくともその事実を本市の子供たちは間近で実体験しているわけです。それが子供たちへ将来へのストレスとして、反映しているのだとすれば、これを私たちの力で何とか取り除いてあげられないか、と思うのです。まずは学校教育の力です。将来に対して不安感を持っているということを、子供たちと関わる教師として、少しでも緩和できないかと思っています。

私見ですが、そのためには、まずは教師がモデルになる必要があると思っています。児童生徒にとって、教師が目の前にいる一番身近で、毎日一番長い時間関わり合う職業人なんです。やはり、教師が生き生きと自分の職業に自信を持って、夢を語って、そうやって子供たちに、きちんと大人としての生き方を見せてあげるといのが、私はすごく大事だと思っています。これは自分への戒めも含めて、そうありたいという願いを含めて思っています。

もう一つは、私たちは教師として、もしくは一人の人間として、やはり限界はあるはず。何を言おうとしているかと言いますと、校長として大事にしたいのは、地域の方や様々な企業の方、いろいろな方々のお力を借りてマネジメントしながら、学校経営に、子供たちに生かしてあげることだと思います。以前、ある研修会で講師の方が「校長の限界を学校の限界にしない」と話していました。校長一人の力で何もかもしようとするのではなく、教職員全員の力、そして地域の方のいろいろな方の力を集めて、目の前の子供たちにどう活用していくかということがとても重要なのだと思います。そういった意味でも、どんな子供に育てたいかというところの明確なビジョンを校長が持つというのが大きいのだと思っています。

また、ややもすると、自分づくり教育の一つ一つの事業が単発になってしまうことがよくあります。スチューデントシティがスチューデントシティそれだけで終わるというように。今日のお話を聞きますと、各学校では本当に事前指導がしっかり積み上げられ、事後指導もしっかりやられている。また、次の学年までつなごうという、きちんとした連続性なり見通しを持った取組をしておられる。そのことが、私は非常に大事なのではないかと思いました。それは、学校の課題改善とか、子供たちの特性を伸ばすということとともに、教育者として私たちがきちんと持たなければならないこと、しっかりと押さえるべきことです。自分づくり教育というものをどうやって学校経営の中にうまく活用していくかという視点が大切です。

答えにならないかもしれませんが、まさしく私は今日のお話を聞いた中で、本当に校長先生方がいろ

いろな工夫をなさりながら、様々な人をつなぎながら、そして、きちんと学年も越えながら、学校経営の中にしっかりとこれを落とし込んでいるというところに、非常に敬意とある意味では感動を覚えました。

自分づくり教育のスタート時は、中学校がどうしても中心となって動いていて、小学校にどうこれを浸透させるかが大きな課題でした。校長先生方のすばらしい取組をお聞きし、これをもっと今度はほかの小学校にも広めていくことが大事になってくるのだと思いました。

私の思いと願いを話させていただきました。ありがとうございました。

中林校長 私は、今の子供たちには、将来大人になったときにしっかりと目標を持って、前を向いて歩いていけるように育ててほしいと願っています。そのためには、小学校、学校教育の時期にどんな教育をし、どのような力を付けていくことが必要なのかを考えています。それは、目標を持つこと、その目標を達成するための方法を知り努力すること、継続する力と失敗や壁に当たったときにそれを乗り越えようとする心を育てることが大切だと考えています。そして、自分一人で生きていくのではなく、家族や友達、先生、いろいろな人との出会いを大切にしていき、人に支えられながら生きていることを感じ、自分自身を成長させていってたくましく生きていってほしいと思います。

そのためには、当たり前ですが、小学校において子供自身を成長させていく6年間の系統性と継続的な教育が必要だと考えています。

1年生から6年生までのそれぞれの段階で学ぶべきことをしっかりと学んでいく。各学年で様々な活動を行う中で、目標を持ってそれに向かって努力して達成感や成就感を味わうことができるようにする。そして、教師、担任が、親が、子供たちの活動をしっかりと評価をすること。学校教育の中では、目標から評価までしっかりとした取組をすることを継続していくことが子供たちの力になると考えます。その中から、自分が目指す方向を見付けることができれば、最高ではないでしょうか。

小学校時代に子供たちは、いろいろな活動に取り組み、教師や親がそれを支援する。そして、その子が、将来花を咲かせることができる芽を見付け、それを育ててやれることができれば、学校として未来を切り開いて生きていける子供を育てることにつながると考えます。

そのための学校経営としては、児童にいろいろな体験と豊かな活動をさせるような教育の計画の作成と、それを実行していく教員の質の向上に校長とし

ての力を発揮することです。

学校の実態、児童・家庭環境・地域、それを把握して、それを生かした教育活動ができるようにしていくには、担任や担当教師だけでなく、校長としても地域や家庭・関係機関との連携を深め、教育活動をサポートする体制づくりが大切になってきます。

そして、何より子供たちに教える教師自身が、しっかりと目標を持ち、それに向かって努力をすることが一番です。子供たちにとって担任、教師の存在は、とても大きいものです。その教師が、教師としてしっかりと生きていくことこそが、一番の教育ではないでしょうか。校長は、それをサポートしていく。しっかりとした教師集団を育てることが、学校経営の最も大切なことであり、子供に生きていくことを教えることにつながると考えます。

小熊校長 震災後の仙台の子供たちは、自己肯定感が低くなっていると言われています。そんな子供たちにどんな教育が必要なのか。本校の起業家教育では、地域と関わる学習を大事にし、そこで学んだことを地域に発信し、評価していただくことで、子供たちに自信を付けさせたいと考えています。



昨年度の5年生の活動においては、ポスターの完成後に、お店の方や地域の方を招いて発表会を行いました。子供たちは、「思いやりをテーマにポスターを作りました」「お店の雰囲気をもとに伝えるのか苦労しました」など、自分たちがポスター製作の過程で考えたり感じたりしたことを、一生懸命に訴えました。参加した店主の方々や地域の方々は、子供たちの発表に真剣に耳を傾け、店作りの工夫や働く思いなどを、子供たちが感じてポスターに描いてくれたことへの感謝とともに、「地域のことを考えてくれてうれしい。」「一緒に荒巻を盛り上げていこう。」などと子供たちを励ましてくれました。

商売繁盛を願ってデザインした土鈴を6年生が届けた時も、「ありがとう、これからも頑張るよ。」とほほえんで、言葉を掛けていただきました。自分たちの活動が、地域活性化の一翼を担っていて、地域の人々に受け止めていただいている。それは、子供たちにとって、大きな励みとなっていると思います。

今年度は、昨年ポスター製作を経験した6年生が、起業家教育2年目の活動に初めて取り組みます。子供たちからは、荒巻の商店を元気にするイベントをしたいという声が上がっています。12月頃に、今はあまりつながりがない荒巻の商店を結び付けるようなイベントを企画できればと考えています。イベントの名称を考えポスターをデザインしたり、地域の

方々にこれまで訪ねたことのないお店に行っていた
だく仕掛けを考えたりする学習をしたいと思いま
す。身近な地元の問題に取り組む起業家教育を行う
ことで、地元愛も育てながら、実践的な学びをさせ
たいと考えています。

起業家教育は、主体的な学び、対話的な学び、深
い学びができるもので、まさにアクティブ・ラーニ
ングそのものです。本年度からは、学びの連携推進
室の御指導の下、文科省の「小・中学校等における
起業体験推進事業」に、小中連携のパートナーの三
条中学校と一緒に取り組んでいます。荒巻小学校は、
これからも、自分づくり教育の中で起業家教育を行
い、未来を切り開くたくましさを身に付けた子供を
育てていきたいと思っています。

鈴木校長 本校で実施している「故郷復興プロ
ジェクト」は、学び方を学び、関わりを通して自分
を見つめ、自己の生き方を考える学習として、学校
経営の重点努力事項としても挙げております。前任
の菊地校長先生はじめ、これまでも、教職員、PT
Aや教育委員会その他の関係機関の御支援もあっ
て、昨年12月に「キャリア教育文部科学大臣表彰」
を受賞したところでした。なかでも、6年総合での
「復興プロジェクト」として続けてきました被災地
の仮設住宅訪問では、「建築と子供たちネットワーク
仙台」の協力による、音を形や曲に表現する学習や、
明成高校の先生から白菜の歴史を学ぶ活動、若林区
で野菜を育てレストランを運営している方の指導に
よる野菜作りなど、それらをうまくマッチングさせ
た活動を行い、年間3回の仮設訪問を実施してしま
した。これまで、「復興応援マガジン」や「復興応
援カレンダー」「歌で笑顔にする曲作り」など、大
きな足跡を残してきました。その学習の過程で、「被
災地の方々に笑顔にする」というテーマのもとに、
子供たちは多くの方々と関わり、豊かな学びをし
てきました。この活動を支えてくださったのは、先
ほど挙げた方々の他にも、宮教大復興支援センターや
市P協からの予算面での援助もありました。このよ
うな支援がなければ、年間に3回も訪問はできませ
んでした。震災から5年を区切りとして、仮設住宅
の自治体が解散し、予算面での援助も難しくなりま
した。しかし、このような活動をここで絶やしては
いけないという思いから、どのようなテーマで子供
たちの豊かな学びを進めていこうかと悩んでいまし
た。そんな時に、学区内の社会福祉協議会の地域福
祉活動推進員の方から、「認知症について子供たちに
知ってもらいたい。」というお話をいただきました。
少子高齢化の波は、吉成学区も例外ではありません
でした。町内会によっては26%の高齢化率のところ
もあるということでした。このような社会にあって、

人々が共に支え合って生活することの重要さと、保
護者や地域と連携して、思いやりや感謝の心を育む
大切さを感じています。そして、「自分たちに何が
できるか」について真剣に考える学習を通して、互
いに住みよい町づくりにも貢献できるのではないか
と思いました。そこで、今一つの社会問題となっ
ている「認知症」を足がかりにスタートすることと
しました。自分たちの住んでいる地域に目を向け、国
見ヶ丘地域包括支援センターや社会福祉協議会など
の協力の下、地域に根ざした学習を現在進めている
ところです。

もう一点ですが、地域とともに歩む学校を目指し
て取り組んでいることとして、学校支援地域本部が
中心となって、学校・家庭・地域が一体となり、子
供たちを育てていこうとする体制ができていること
です。

活動の一つである「てらこや」について紹介しま
す。「てらこや」は、学校支援地域本部を中心とし
て、学区の社会福祉協議会やボランティアの方々が、
夏休みの始めと終わりの4日間ずつと冬休み始めの
3日間の計3回、1年生から3年生までの子供たち
の学力の底上げを図ろうと始まったもので、今年度
で6年目となります。スタッフは、社会福祉協議会
や各町内会長さんや役員さん方の大人10数名、そし
て、吉成中生のボランティア、通称「吉ボラ隊」が
15名ほど毎回参加してくれました。国語、算数のプ
リント学習で30分ずつの復習を行い、その後に子供
たちの興味・関心をそそる多種多様な活動が待っ
ています。動くおもちゃやシャボン玉などの理科の体
験学習や、ピアニストやチェロ奏者による演奏会な
ど、「てらこや」を主催する方々が企画し、運営し
ています。毎年子供たちの人気度が増し、初年度は
50名ほどだった参加者も、児童数が減少する中、今
年は90名と増加しています。人数制限をせずに希望
者全員を受け入れる方針に、地域の子供たちを地域
で温かく育てていこうという熱い思いが伝わってき
ます。そばにいる大人の方や吉ボラ隊がプリントを
採点し、アドバイスをしてくれたり、褒めてくれた
りすることが、子供たちのやる気につながっている
ように思いました。また、子供たちの豊かな心を育
んでいくために、学校での学習にとどまらず、より
多くの地域の方々や専門分野の方々から学ぶ機会が
あることに非常に感謝しています。このような活動
を通して、子供たちは地域の方々や中学の先輩に温
かく見守られていると実感し、それがやがて自分も
誰かの役に立とうとする人に育っていくに違いない
と思っています。

以上、様々な人との関わりを通して思いやりや感
謝の心を育み、将来に向けて学ぶ意欲を高めていっ
てほしいと願っています。

石田校長 子供たちには、自分の未来は自分の力で切り開いていってほしいと思います。そのためには、自分の目標を持つこと、それに向かって努力すること、そして、その結果がどんなものであっても受け入れるという経験を積み重ねることが必要だと考えます。

今年度は、目指す児童像を、南光台東の「ひ」「が」「し」を頭文字とした「人に優しくする子」「頑張る子」「しっかり学ぶ子」とし、全校児童が、この目標を唱えられるようにすることから始めました。朝会での話や校舎内の表示、児童会の取組、学年のスローガンなどにも積極的に絡め、子供たちに、これは自分たちの目標だという自覚を持たせたいと思いました。学年のスローガンは、「challenge」「Do your best」「いつでも本気」など、積極的に力強い表現のものが多く、日常的に活用しています。

それによって、一人一人の具体的な目標は違っても、学年や全校児童の向かう所は同じであることを意識するようになってきました。また、教師側も学年経営を大切に考え、良い集団を作ろうと工夫するようになりました。友達と一緒に頑張れたという体験も大きな成功体験として残るものだと思います。

目標の実現のためには、「今、自分のできることをしっかりやること」が大切だと思います。今の延長に未来があると思います。それは、人としての誠実な生き方につながるものだと思うからです。今できることを精一杯することで、できることが増えていくこと、そして、できることが増えたら、次は、その力を誰かのために使う人になってほしいことを子供たちに伝えています。

地域の方々にも、子供たちの出番や役割についてお願いしてきました。今年は、各町内会の夏祭りや学区民運動会で、子供たちが当日の運営に生き生きと関わる姿がありました。八十代の高齢の方と小学生と一緒に審判をする姿はなかなかほほえましいものでした。

また、小中連携で取り組んでいる「あいさつ運動」や「地域一斉清掃」でも、可能な限り児童生徒の役割を増やしてきました。今年度から実施する小中合同地域防災訓練では、6年生は中学生と一緒に避難所運営に参加する予定で計画しているところです。

学校では、様々な学習や活動において、挑戦する場面や努力を要する場面、我慢を強いる場面を意図的・計画的に作り、壁を乗り越えるという体験をさせようと思っています。子供には、年齢に応じた、また一人一人に応じた、その時乗り越えなければならない壁があるのだと思います。それを越えてこそ、本当の自信と自己肯定感が生まれるのだと思いま

す。

たくましく生きる子供を育てるという視点に立てば、学校は、見守り温かく支えながらも、鍛えるという意識を持つことも必要ではないかと考えています。そこには、教師の覚悟と責任も重要です。

もう一つ、自分づくり教育を進める上で大切にしていることは、子供を取り巻く人の環境づくりです。保護者や地域の大人が、生き生きと仕事や地域の活動に取り組む姿を見せる、そんな環境を作りたいと思い、働き掛けてきました。今年度は「子供の手本になろう」がPTAや地域の合い言葉となり、会合の度にPTA会長さんや町内会長さんから、皆さんに話し掛けられています。

子供たちの一番近くにいる大人である私たち教師の役割は更に重要だと思います。目指す教師像を先生たちが自分のものとして捉え、生き生きと子供に向き合い、互いに認め合いながら仕事をする姿、よりよいものを追求する姿を見せる、質の高い教師集団になることを学校経営の柱としています。

司会（廣瀬） 最後に、本日の座談会のまとめを含めまして、成田校長先生にお話をいただきます。

成田校長 本日の座談会では、校長先生方から各校における仙台自分づくり教育に対する様々な取組であるとか、たくましく生きる子供たちの育成を目指した学校経営の一端をお聞かせいただきました。

まず、昨年度から全市で展開されている仙台子ども体験プラザの事業についてです。いずれの学校でも、単なる体験に終わることなく、一市民として子供たちが働くということを通して、社会や経済の仕組みを学ぶことが実現できているようです。その中で、子供たちは、最初は戸惑いもあるようですが、学校だけでは決して味わうことのできない体験により、大きな達成感や満足感を得ているようです。他校と一緒に活動することも、コミュニケーションの大切さであるとか、周囲への気遣い、気配りなどを学ぶ場となっているようです。

事前学習においても、例えば作成された求職票について、管理職が協力し面接を行うなど、様々な工夫が見られていました。そのことで、子供たちが今の自分を見つめ、将来に対する様々な思いを膨らませることができるようになってきていることも、大きな特徴だと言えます。また、このような子供たちの姿を見て、親自身も、社会の一員としての自覚と責任を持って生きている姿勢を、子供たちに示していくことが必要だという感想が寄せられたのが印象的でした。

自分づくり教育については、外部講師を招いて講話をいただくとか、地域での職場体験、起業家教育、

たくましく生きる力育成プログラムと、各校で様々な取組を工夫されておりました。いずれにも言えることは、子供たち一人一人の活躍の場をきちんと設定していることだと思いました。そして、地域からたくさん支援をいただいて活動を膨らませ、一方で地域が子供たちの姿から活性化を呼び起こされている部分もあり、これがまさに、「人がまちをつくり、まちが人を育む」という仙台市教育振興基本計画の中にも示されている「地域とともに歩む学校」その姿を体現しているのではないかと思います。

先ほど室長様からも震災以降、自己肯定感がようやく上がってきたとのお話がありましたが、私も注目しているところでございました。

ところで、震災発生直後、避難所に水を運んだり一人暮らしのご老人のところを訪問し、話し相手になってあげたりするなど、いろいろな地域で、中学生の活躍が実は話題になっておりました。その中には、どちらかというところ、それまで学校には反発を感じていた子供たちもいたようですが、震災を機に、人の役に立つということを経験し、大きく子供たちの意識が変わったようです。平成23年度に実施した仙台市生活・学習状況調査の結果によると、「人の役に立つ人間になりたい」「人が困っている時には進んで助けたい」といった質問については、中学生の値が震災前に比べて10ポイント近く増加して、その後も高い値をキープしております。

このことから言えるのは、どんな子供たちも、周りから認められたい、役に立ちたいという気持ちを抱いており、中学校が行っている職場体験をはじめ、仙台自分づくり教育の大きな意義がここに見いだせるのではないかと私は思います。

本日、様々な事例を御紹介いただいた4校の校長先生方の学校経営には、自校で展開している自分づくり教育を通して、目標に向かって努力を惜しまな

い子供たちであるとか、壁に当たったときでも、それを乗り越えられる強さを持った子供たちを育成していきたいという強い願いが感じられました。また、様々な人々との出会いも大切にしながら将来の地域の人材として、地域や社会に貢献できる大人になってほしいというメッセージが込められているようにも思いました。

本日は各校で行われている特徴ある実践を御紹介いただきました。大変ありがとうございました。また、佐藤室長にも、お忙しいところお越しいただき、様々な御指導をいただきましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。

近澤副部長 本日は御多用中にも関わらず、学びの連携推進室の室長佐藤淳一様に御臨席を賜りして誠にありがとうございました。

また、仙台市小学校校長会会長、片平丁小学校成田校長先生、そして、本会の会員の吉成小学校鈴木校長先生、南光台東小学校石田校長先生、東宮城野小学校中林校長先生、荒巻小学校小熊校長先生に御出席いただきまして誠にありがとうございました。

仙台自分づくり教育の推進についてそれぞれのお立場から、取組状況の御紹介や今後の展望等について貴重なお話を伺うことができました。

本日の座談会の内容は、この後、広報部でまとめさせていただきまして、仙台市小学校校長会の会報紙の『廣瀬川』に掲載する予定でございます。また、本会の会員のみなならず、仙台市校長会のホームページから仙台市の小学校の取組を全国に向けて発信することになっております。

本日はお忙しい中、貴重なお時間を頂戴いたしまして誠にありがとうございました。以上簡単ではございますが、閉会の挨拶といたします。



提言

復興に向けた創意ある教育

6 学年の自己有用感を高める毎日の「たてわり一斉清掃」

第1地区会長 武田 洋（太白小学校）

平成25年度まで本校では各学年ごと決められた清掃箇所を各学年ごと放課後に清掃していた。しかし、清掃後もだいぶほこりが残るということで、平成26年度に一斉昼清掃に変更した。全学年時間をそろえられるように、給食の後に昼休みを設け、その後に全校児童で清掃するようにした。さらに平成27年度は、児童数減少により学級単位で清掃箇所の分担が難しくなってきたことから20のたてわりグループを編成し、清掃箇所を1か月ごと交替して清掃する「たてわり一斉清掃」とした。

この清掃の工夫は、当時清掃担当だった職員の発案をもとに全職員で話し合い改善したものである。

給食後に昼休みをとってから清掃に入ることにについては、校長として判断に迷ったが、1学年が給食の片付けに時間を要すること及びおなかを落ち着かせることを考慮し、清掃が始まる5分前に担当委員会が合図の放送を入れるということでやってみることにした。1年間実施して、5分前行動がほとんどの児童に定着し、清掃活動も順調に行われた。

少人数化に伴う「たてわり一斉清掃」の提案がなされたとき、私は即座に取り入れることにした。以前から言われているピアサポートプログラムそのものであると思ったからである。

このたてわりグループを通じて、児童は学年の垣根を越えて名前や人となりを知り、上学年は下学年に優しくそして根気強く教える姿が多く見られるようになった。さらに、児童会の他の行事でもこのグループが活用されるようになった。

また、陸上記録会や卒業式ではたてわりグループでお世話になった6年生宛てに下級生が心温まるメッセージや感謝の言葉を寄せていた。

「たてわり一斉清掃」は、6年生にとって特に自己有用感を感じることでできる活動となっている。仙台市生活状況調査でも、自己有用感に関わる項目が大幅に改善している。

提案した職員に感謝するとともに、形骸化させないように今後も毎日全職員で見守ったり範を示したりしながら続けていきたい。

提言

復興に向けた創意ある教育

地域とともに歩む学校経営を目指して

第3地区会長 鈴木 茂美（根白石小学校）

災害発生に備え、児童の安心・安全を保障するための防災環境を整備することは、学校の重要な役割である。また、同時に、学校は災害時の緊急避難所になるなど、防災施設の重要な拠点としての役割も担っている。しかし、これらの役割を果たすためには、学校だけの取組では限界があり、学校・地域・関係機関と連携、連動した体制作りや取組がより重要になってくる。

根白石地区は東日本大震災による被害が少なく、人的被害はもちろん、避難所も1日しか開設されなかった地域である。そのため児童を含めた地域住民の防災意識はあまり高いとはいえず、地区が一体となった地域防災訓練もいまだに実施されていない。

地域と一体となった防災体制の構築が、本校の大きな課題となっている。

このような状況の中で、校長としてとりわけ重視しているのが「地域とともに歩む」学校経営である。

先の大震災での教訓からも、学校と地域の常日頃からの連携が、災害時の大きな力になったことが実証されているが、地域とのよりよい信頼関係を築く

には、地域からの協力だけでなく、学校が地域へ貢献するという双方向の関わりが必要となってくる。

泉ヶ岳のすそ野に位置する根白石地区の歴史は古く、独自の文化が根付いている地区でもある。百年以上前から地域に伝わり、地域の保存会の方々に高学年児童が指導していただいている「アセ踊り」を始め、鉢植えの生きた竹を使い、地域をあげて、百本以上の手作りの七夕飾りで町を彩る「根白石民俗七夕まつり」、根白石中学校区4校に伝承されている踊りを一堂に会して披露する「冠のふるさと伝承まつり」など多数の地域行事がある。



これらの活動を「総合的な学習の時間」を中心とした教育課程に組み込むことで、学校と地域の「顔の見える関係」づくりを推進するとともに、地域の一員としての自覚を持ち、人との関わりを大切にする児童を育てたいと思っている。

提言

復興に向けた創意ある教育

原町小 防災教育「自助・共助」

第5地区会長 長谷 一哉（原町小学校）

東日本大震災から間もなく6年。小学校で震災を経験した児童は卒業し、現在在籍している子供たちはそれぞれが異なった場所で震災を経験し入学してきた子供たちです。防災教育の新たな段階といえるのではないのでしょうか。

原町小学校では防災教育の「自助」「共助」の視点から目指す児童像を以下のように設定しています。

〈自助〉災害に関する基礎的な知識や対応方法を身に付け、災害時に落ち着いて行動し、「自分の命は自分で守る」ことができる児童

〈共助〉災害時やその後の対応と復興に向けて、互いに協力し合って進んで行動できる児童

これらの児童像を具現するために原町小学校では次のような取組をしています。

1 防災ミニ訓練

年3回の避難訓練に加え、毎月行っているのが防災ミニ訓練です。授業開始前の5分間で行っています。繰り返し行うことによって「自分の命は自分で

守る」ことができるようにするのがねらいです。訓練のための訓練にならないよう4パターンで行っています。

2 幼稚園の避難訓練への参加・協力

原町小学校には5・6年生で組織する少年消防クラブがあります。その活動の一つとして、学校と隣接する幼稚園の避難訓練に協力しています。

地震発生時、小学校の校庭に避難してきた幼稚園児を5年児童がお世話をし、安全が確認された後、園児と手をつなぎながら園まで送って行きます。「協力し合って行動できる児童」を目指すものです。緊張感の中にもとてもほほえましい光景が見られます。

地震に限らず、火山噴火や大雨、台風、竜巻など自然災害はいつどこで起きても不思議ではありません。加えて、人災による災害も考えられます。「自分の身は自分で守り、協力して災害を乗り越える」そんな子供たちを育てる防災教育を推進していきたいと考えています。

提言

復興に向けた創意ある教育

積み重ねを力にする防災教育

第7地区会長 佐々木 弘幸（中田小学校）

東日本大震災を経験した子供たちにとっては、復興への歩みを進める日々の様々な経験や教師から語られる言葉の一つ一つが最も身近な防災教育になる。

中田地区町内会連合会が毎年10月に実施する総合防災訓練に平成27年度から中田小学校も参加している。子供が保護者不在で地域にいるとき、自分の命を自分だけで守るのではなく、地域の方々とのつながりでより確かに守れるようにしたいと考え、自分の所属地区を意識させている。そして、地域の方々と顔の見える関係を構築していきたい。総合防災訓練当日の学習の中心は、訓練への参加と見学のほか、防災教育副読本を活用した保護者参観の授業である。

平成26年度に校庭に災害用備蓄倉庫、災害時給水栓が設置された。実際に防災対策の具体を見ることが関心が高まる。そこで、災害用備蓄倉庫の中身をブルーシートの上に並べて展示し、子供たちが担任の説明を聞き、備蓄品を確認できるようにした。災害時給水栓についても、市から訓練用ホースを借用し、教師が接続して配水管直結の水が出る様子を見せている。

この総合防災訓練で大切にしたいのが、中田市民

センターの取組である。防災講座での実践をブースで紹介している。防災士や講座のメンバーにより、アルミ缶で炊くサバイバル飯、新聞紙で作るスリッパ・スプーンなど、毎年注目すべき提案がブースで行われている。訓練以外にも連携し、5年生の総合的な学習の時間「ぼくたち防災メッセンジャー」では、この講座に参加している保護者の方々をゲストに招き、非常持ち出し袋の中身について考える授業を実践した。

また、教職員の意識を高めるために、防災士を講師に招いての現職教育も行った。このとき紹介された防災学習関連教材（防災カルテット、防災ダックなど）も学年単位で同時に活用できるように準備してある。

6月の地震避難訓練では、校庭に全学年が一次避難した後、二次避難場所である屋上（雨天時は3階教室）に避難している。これは、津波や名取川堤防の決壊、内水氾濫を想定しての訓練である。

防災教育は、未来の担い手である子供の命を守る取組である。日頃からの積み重ねが力になる。

学区紹介 地域とともに

「みんなの学校・
鶴谷小学校」を目指して

丹野 伸裕（鶴谷小学校）

本校は、仙台市北東部の丘陵地に位置し、昭和46年に開校いたしました。鶴ヶ谷は高齢化が進む団地となっていますが、市民センターの改築、市営住宅の高層化、商業用地の再開発等が進み、活気に満ちあふれ、今後児童数の増加も見込まれています。

鶴谷小学校は、地域との結び付きが強く、たくさんの方々に支えられ開校46年目を迎えました。学区体育振興会、おやじの会「ばばさんず」、社会学級、民生委員、児童委員、そして各町内会の方々など、学校とともに歩んできた諸団体も多く、学校運営の大きな支えとなっています。また、昨年度、学校・家庭・地域をつなぐキーステーションとして学校支援地域本部「つるっこ本部」が立ち上がりました。保護者を中心に多くの方々にボランティアに入っただき、子供たちの学習及び学校環境の充実につながっているところです。

さらに、地域連携の誇りとして、14年連続して取り組んでいる二つの行事が挙げられます。一つ目

は、「地域交流教室」です。ちぎり絵、手話、日本の伝統芸能、ヨガなど、地域にお住まいのその道に卓越した方々が講師となり、毎年12、13の講座が開かれます。子供たちにとって、貴重な体験の場となっています。二つ目は6年生が全員参加している「みちのくYOSAKOIまつり」です。創設当初は学校主体で進めていましたが、数年前から6学年PTAに全面支援をしていただくようになりました。6年生は、地域よさこい団体の方々から指南を受け、下学年にも教え、練習を積み重ねます。まつり当日の子供たちが見せるはつらつとした踊り、仲間みんなで成し遂げた一体感は、鶴小の子供たちが正に輝きを見せるとき、保護者と地域の協力無くしてなれません。

本校は今年、これまでの地域連携の礎を基に新たなスローガン「みんなの学校・鶴谷小学校」を掲げました。教職員のみならず、児童、保護者、地域の皆さんと共につくる学校です。子供たちの健やかな成長のために、共に支え合う関係を今後も大切にしていきたいと思います。

学区紹介 地域とともに

生活する力を育む通学合宿

仲野 繁俊（連坊小路小学校）

連坊小路小学校は、本年度、創立130周年を迎えました。連坊小路の地名は、伊達藩時代に多くの宿坊が連なっていたことによります。現在も学区内に20有余の寺院があり、門前町の名残をとどめています。学校創立時から地域が主体となり、お寺の本堂を開放して勉強できるようにしたり、境内に校舎を建てたりして、教育を尊重している土地柄です。

本校の特色ある教育活動の一つが、通学合宿です。通学合宿は、4年生から6年生までの任意参加の児童が地域のお寺に2泊3日宿泊し、親元を離れ、団体生活の中で日常生活の基本（調理・片付け等）を自分自身で行いながら学校に通う取組です。今年で9回目を迎えました。今年の参加者数は59名です。

この通学合宿は、児童が地域の多くの大人や先輩と関わる絶好の機会となる取組です。おやじの会、PTA本部、学校支援地域本部、民児協、連合町内会、学校防犯ボランティア、仙台市中央市民センター、

児童館、中学生・若林区ジュニアリーダー・大学生ボランティア等、地域が通学合宿実行委員会を組織して運営し、児童と丁寧に関わります。

活動内容は、みんなで協力し、生活することです。地域で育つ児童の社会性、自主性、協調性等を伸ばし、「生きる力」を育むことが期待され、地域の教育力を向上させる体験活動となっています。

通学合宿に参加した児童からは、「知らない人と一緒に生活できるか心配だったが、たくさんの人にたくさん話し掛けてもらい、助けてもらいながら楽しく生活できた。」「料理は大変だった。いつも母はこんなに大変な思いをして作っているのかと、感謝の気持ちで一杯になった。来年はみんなをまとめていきたい。」「大変だったが予想以上に楽しく感じた。来年は中学生ボランティアとして助けたい。」等の感想がありました。また、保護者からは「普段もたくさんの人に支えられて生きているからこそだということに気付けたのは本当に良かった。」等の感想が寄せられました。

地域主体の通学合宿は、地域と学校の連携を強める活動となっています。連坊地域の中で、児童を育む意識が更に醸成するものと期待しています。

研修部から

今年の研修部を振り返って

研修部長 鶴谷 研 (長町小学校)

1 はじめに

今年度も、7月に行われた第56回東北連合小学校長会研究協議会岩手大会(以下東北連小岩手大会)をはじめ、10月に第68回全国連合小学校長会研究協議会高知大会(以下全連小高知大会)、11月に第70回指定都市小学校長会研究協議会さいたま大会(以下指定都市さいたま大会)、そして第41回宮城県小学校長会研究協議会東部本吉大会(宮城県東部本吉大会)の四つの研究会が開催された。研修部では、領域別研究委員会、指定都市問題研究委員会がそれぞれ研究発表に向けて対応し、学校課題委員会は今年度から新たな課題に取り組んだ。また、県市の権限委譲が進められる中で県と市の研修部は県市研修部連絡協議会を通じて連携を図り、平成30年度以降の研究の割当てを計画している。

2 東北連小岩手大会(平成28年7月7日～8日)

昨年度の福島大会に引き続き、東日本大震災復興支援への感謝の気持ちを込め岩手県盛岡市で開催された。東北各地から1100余名の会員が集い、仙台市からも62名の会員が参加した。

【大会主題】

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとを愛し 共に支え合いながら未来を拓く子どもを育てる学校経営の推進～

1日目は会員を迎えるプレゼンテーションに始まり、開会式、シンポジウムが開催された。3人のシンポジストはいずれも震災時に大きな被害を受けながらも強いリーダーシップにより復興を成し遂げ、当時の様子や今日に至る取組から郷土の復興への強い思いをうかがうことができた。

2日目は11分科会が行われた。宮城県からは二つの分科会で話題提供を行い、仙台市からは第4分科会「知性・創造性」に領域別研究委員会の2年間にわたる研究の成果を発表した。

○第4分会「知性・創造性」視点①

「知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善における校長の在り方」

発表者 東長町小学校長 福田 喜美恵 先生

PDCAサイクルを機能させて目指す力を育む教育課程を編成するための校長の役割と指導性を、市内5校の取組も紹介しながら発表した。

分科会では二つの視点に基づいた発表を受けて、ワークショップ形式で活発な意見交換が行われ、成果と課題が明らかになった。その後、分科会ごとに閉会行事が行われ次年度山形大会へ引き継がれた。

3 全連小高知大会(平成28年10月27日～28日)

全国各地から2500余名の会員が、自由民権運動発祥の歴史をもつ高知市に集まり開催された。

【大会主題】

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～社会の変化に主体的に関わり 共に豊かな未来社会の創造に挑む子どもの育成～

1日目の開会式では、全連小大橋明会長の挨拶から始まり、片岡忠三高知大会実行委員長からは「変革・チャレンジ・未来創造」の大会コンセプトが示された。続いて文部科学省講話では次期学習指導要領の改訂に向けたこれまでの審議について、その内容や今後の流れについて簡潔に御説明をいただいた。

その後、13分科会に分かれて研究協議が行われた。参加した第4分科会「知性・創造性」でも245名の参加があり、36班の小グループを編成し、二つの視点、2県の研究発表を受けて協議を行った。

○視点①「新たな知を拓く」教育課程の工夫

埼玉県久喜小学校長田村俊一先生からは～「夢創造科」(科学技術)へのアプローチ～をテーマに、文科省研究開発校としての取組を基に、科学技術に関する探究的・創造的活動を通して、基礎的知識や技能を習得し、科学技術を適切に評価し活用できる力を身に付けた児童の育成の実践について紹介され

た。

○視点②「豊かな未来社会の創造に挑む子どもを育てる教育課程の編成・実施・評価・改善」

香川県苗羽小学校校長川井文代先生からは「グローバルで楽しい学校を創る」をテーマに、これからの時代を生き抜くグローバルな力を身に付けつつ、地域のよさ（ローカル）をしっかりと感じ取ることのできるグローバルな教育課程の創造について研究が紹介された。「子ども主体」「地域との連携」を視点にカリキュラム・マネジメントにおける校長の役割について成果と課題が協議された。

2日目は水ビジネスの起業家 森澤紳勝氏、女優 白田久子氏、作家 山本一力氏の3人によるシンポジウムが行われた。「変革 チャレンジ・未来創造」をテーマに、これまで歩んできた人生のターニングポイントや新たな挑戦について独自の考えを披露された。全連小研究部長種村氏が3人の未来創造についての思いをまとめ、閉会となった。

4 指定都市さいたま大会(平成28年11月1日～2日)

21の政令指定都市から300余名の会員が集まり大都市が直面する教育上の諸課題の解決に向け研究協議会が開催された。仙台市からは11名が参加した。

【大会主題】

「ゆめをもち、未来を切り拓く子どもをはぐくむ学校経営の推進」

1日目の開会式では、さいたま市 西川和利大会会長は開催の挨拶とともに熊本地震で大きな被害を受けた熊本市へのお見舞いと1日も早い復興を述べられた。その後、各都市の参加者が6分散会に分かれ話題別情報交換会が行われた。テーマは各都市へのアンケートから「税源移譲」「教職員の資質向上システム」「学力向上」「いじめ対策」「特別支援教育」「防災教育」が取り上げられた。各都市2分という短くまとめた発表の後、小グループで情報交換を行った。「税源移譲」の第1部会では、すでに市から給与を含め権限が明確に示されている都市もあれば、いまだに具体を示されていない所もあることが分かった。また、県と指定都市との校長会の分離については今後の大きな課題として取り組む都市が多かった。午後からは六つの研究協議会が開催され、仙台市からは第6分散会において西中田小学校長田辺先生が指定都市問題研究委員会の2年間にわたる研究を発表した。

○第6分散会「学校・家庭・地域連携上の諸問題」
「地域ぐるみで子どもを育てる体制を推進する校長の役割」
～学校支援地域本部の取組を通して～

発表者 西中田小学校長 田辺 泰宏 先生

仙台市の学校支援地域本部の現状を市校長会アンケートで集約し、成果や学校の抱える課題を紹介した。また、「西中田こみこみスクール」の特色ある実践事例を紹介し、校長の果たすべき役割や今後の課題を示すことができた。

夕方には指定都市全員参加の交流会が開催され、情報交換と懇親を深めることができた。

2日目は全体研究会に続いて教育講演会「メシが食える大人に育てる」をテーマに花まる学習会代表 高濱正伸氏による講演が行われた。不登校や引きこもりから社会で活躍できないでいる若者が増えていることに危機感を抱き、親を変える取組、自ら塾を開き野外体験などの社会性を育成する取組による成果などを、歯切れよい口調で講演された。

5 宮城県東部本吉大会(平成28年11月11日)

宮城県は2年に1度研究協議会を開催している。今回は被災地南三陸町で4分科会8研究視点で発表が行われた。仙台市から研修部を中心に9名が参加した。県では8地区ごとに研究が進められていて2年間の研究の成果が紹介された。またシンポジウムでは被災から立ち上がった3人のパネリストの力強い発表が印象的であった。

6 その他

学校課題委員会では、震災後「防災と復興」をテーマに研究を進めてきたが、今年度から新たな課題として「学校の組織的運営と校長の役割」をテーマに取り組む。9月8日には文科省より小倉基靖氏を招いて「教育改革の方向性を踏まえた学校の組織的な運営と校長の在り方について」をテーマに講演をいただいた。今後、校長会アンケートをまとめ、研究を推進していく予定である。

研修部では平成30年度以降の東北連小の分科会割当てなど今後の予定を県と協議を進めている。県では学校の統廃合が進み会員が減少しているという大きな課題を抱えている。また、平成32年度には東北大会宮城大会を仙台市が主管で開催する予定である。次期学習指導要領の全面実施の年と重なり、今後の動向を確認しながら研究を進めなければならない。

生徒指導部から

東日本大震災から6年目を迎えて

～これまでの5年間とこれから～

生徒指導部長 渡邊 大助 (木町通小学校)

1 はじめに

杜の都の学校教育においては、今年度の最重点事項を「豊かな心の育成～いじめ防止対策の徹底～」としています。また、仙台市小学校長会においては、「心の教育と児童の健全育成の推進」を活動の重点の一つとしています。

生徒指導部の活動の方針は、「児童の健全育成等今日の課題に対し、その指導と対策の充実に資する。」です。仙台市や校長会の重点事項を踏まえ、生徒指導部の方針に沿って、調査研究、研修会の開催、中学校生徒指導部会や関係諸機関との連携、故郷復興プロジェクト等の活動を推進してきました。以下、主な活動を紹介いたします。

2 調査研究

【これまでの5年間】

平成23年度から平成27年度までの5年間、東日本大震災に関わる校長としての対応というテーマでアンケート調査を実施してきました。調査内容は、5年間を通して大きく二つです。

その1……東日本大震災で各小学校がどのような状況におかれたか。(現在もおかれているか)

その2……震災対応に当たって校長としてどのようなリーダーシップを発揮し、どのような具体的対応・取組を行ったか。

5年にわたって、各校の状況・取組をまとめてきました。そして、最終年の昨年度のまとめの最後には、「次世代の校長へのメッセージ」と題して、東日本大震災を管理職として経験した校長先生方の生の声を掲載しています。大変貴重な資料になると思っています。

5年前より現職にある方は、5年分の研究紀要をお持ちだと思いますが、新任の校長先生方などで過去の資料を欲しいという方は、生徒指導部までお声掛けいただければと思います。

【今年度の調査研究】

今年度は、新たなテーマを設定し、調査研究活動

に取り組んでいます。仙台市の最重要課題でもある「いじめ防止対策」についてです。9月にアンケートを実施し、現在まとめの作業を行っているところです。3月には皆様のお手元に届くと思います。

3 故郷復興プロジェクト

震災から5年が過ぎ、6年目になりました。小学校で震災を体験した児童はいません。記憶にも残っていない児童は、約半数になります。震災をどのように語り継いでいくか、故郷復興プロジェクトをどのように推進していくべきか、まさに転換の時期になると思います。全市で取り組んできた七夕飾り制作についても、深く考えさせられた1年でした。

児童生徒による故郷復興プロジェクト（七夕飾り制作）の今年度のテーマは「故郷の未来のために～星に願いを 次世代の扉を開く～」です。一人一人の折り鶴制作や学校ごとの制作の方法や内容は昨年度までとだいたい同じですが、今年度は、七夕飾りの回収・制作方法が大きく変わりました。市内1か所での回収から8か所での拠点校方式になりました。拠点校を生徒指導部で担当しました。

拠点校を担当することにより改めて感じることもありましたが、今後も継続していく場合の回収・制作方法の在り方はもちろんですが、故郷復興プロジェクトの一環として取り組む七夕制作の意義・ねらい等を私たち校長が改めて再確認し、更なる啓発を行う必要があるのではないかということです。有意義な活動になるよう検討を進めていきたいと思っています。



4 終わりに

本部会の活動に当たり、関係機関の皆様、会員の皆様の御協力に改めて感謝申し上げます。



新任校長所感

震災から学び、
復興に取り組む学校経営

地域とともに取り組む防災教育

猪股 由美子（作並小学校）

10月行われた作並町内会防災訓練に全校児童17名が参加しました。当日は、防災副読本を活用して震災時の様子を学習した後、地域の方と合同で地区ごとに避難者名簿を作成したり簡易トイレの組立てや発電機の使い方を学んだりしました。子供たちは、トイレ用の水をプールから運んだり、炊き出しの手伝いをしたりしました。子供たちには地域の一員であるという自覚を持たせたいと考えています。

復興プロジェクト集会では、全校で学ぶ防災授業を行っています。今年は「家で一人のときに地震が起きたらどう行動すればよいか」というテーマについてグループで話し合い、より良い行動について考える授業を行いました。現在在籍している児童は震災の記憶がほとんどなく、これからは震災後に生まれた子供たちが入学してきます。防災教育では、あの震災での困難な状況を知るとともに、自分の命を守り安全を確保する自助の力、進んで地域に協力できる共助の力を育むことを目指し、地域とともに歩む学校の推進を更に進めてまいります。

家庭や地域と連携して

玉手 克彦（大倉小学校）

震災時、ライフラインがストップし、余震が頻繁に続く中、体育館には続々と避難者が増えてきて、暗くなってからは、700人以上の避難者でいっぱいになった。避難所開設時は、様々な準備と児童の引き取り対応を同時に行い、職員で分担しながら、また、地域の方と協力しながら対応した。この経験は、防災を考えるうえで常に念頭に置いて生かしている。本校は、仙台市の北西部に位置し、山とダムが近くにあり、緑豊かな自然環境に囲まれている。ただ、大雨が降ったときや地震が起きたときには、土砂災害が心配な所でもある。今年は、例年になく台風が多く上陸してきたため、土砂災害警戒情報が何度も発令され、大倉小はいち早く避難所開設を行った。大倉の地域避難所運営マニュアルに基づいて、我々教職員だけでなく、保護者や地域の方々も素早く対応することができた。やはり震災の経験が大きいと感じた。学校の組織力と校長のリーダーシップの重要性を一層強く感じた。防災に関し今後更に、家庭や地域と連携しながら進めていきたい。

特別な配慮を要する 子供の避難と地域の力

後藤 景子 (南吉成小学校)

震災当時勤務していた鶴谷特別支援学校は仙台市全域が学区です。震災時は、高等部の卒業式が終わり、学校には教職員のみの状態でした。指定避難所になっていなかったために、物資・連絡手段がない中、ラジオからの情報を聞きながら、仙台全域の地図で被害の大きい地域を確認し、周辺に児童生徒の自宅や職員の自宅がないかの確認を急ぎました。また、児童生徒の安否確認にも時間と労力を要しました。携帯が繋がらないため、担任が自宅まで行って様子や避難先を確認することもしました。4月になって地域との協議会の際、避難所（大勢の中）で過ごすことができない障害のある児童生徒とその家族を自宅で過ごせるようにと、町内の方々が協力してそのお宅を片付け、おうちで過ごせるようにしたという話題が出ました。支援学校が福祉避難所としての役割を担うべきだろうとの御意見もありました。その経験から、今は地域の中にある学校として、地域の方々のニーズを考慮することも踏まえ、町内の方々と、中学校との連絡・連携を大事にしながら備えていきたいと考えています。

人とのつながり

三浦 敏光 (福岡小学校)

震災時、勤務していた大倉小学校は、山間部に位置するため地盤が強く、沿岸部ほど大きな被害がありませんでした。それでも、ダムに架かっている橋がS字に曲がったほどの未曾有の大地震でした。

本震後、沿岸部の方が避難するかもしれないという連絡が入り、昼夜問わず受け入れ体制を整えていました。その間、学校が休みでも職員が出動してい

ることを知って、たくさんの保護者や地域の方が食事を差し入れてくださいました。また、水・電気が復旧するとお風呂に入りにくるよう声を掛けていただきました。とてもありがたく、そして温かく思い、「人とのつながり」の大切さを改めて実感したことを今でも忘れられません。

それ以降、学校に関わる方に対して、常に敷居の低い顔の見える学校づくりを大切にしていきたいと強く思いました。現任校の福岡小学校でも、これまで築いてきた学校と地域との深い結び付きを継承しながら、更に子供たちの教育力や防災対応力を高めていく所存です。

「顔の見える関係づくり」を目指して

須藤 洋 (松森小学校)

東日本大震災当時、教頭として勤務していた幸町南小学校には、立ち入り禁止になった市営住宅の住民の方々が数多く避難してこられました。30日間の避難所運営に関わらせていただいて感じたことは、顔の見える関係づくりと緊急時の対応訓練の大切さです。

震災の半年前、たまたま地域の合同防災訓練を勤務校を会場にして行いました。仮設トイレの組立て、アルファ米の炊き出し訓練には、当時の職員のほとんどが参加しました。まさか半年後の避難所運営に役立つとは、その時は夢にも思いませんでした。震災直後、職員が中心となって避難所運営をスムーズに軌道に乗せることができたのは、まさにこの訓練のおかげでした。

現在の勤務校である松森小学校で私が心掛けていることは、地域の方々と顔の見える関係づくりと小中連携です。今後、緊急時の対応訓練を更に充実させていくことで、地域のために動くことのできる児童生徒をより多く育成していきたいと考えています。

地域の魅力を語り合う職員室に

菅原 弘一（六郷小学校）

本校では、職員の間で、地元産の「仙台井土ねぎ」が、ちょっとしたブームになっています。震災から立ち上がり、地元・六郷を元気にしようと取り組んでいる人々の姿が、ねぎの背景に浮かび上がって見えてきたことが、先生方の心に響いたのだと思っています。複数の学年で、教材化を図り授業実践を行おうとしているところです。

東日本大震災を経て、「地域とともに歩む学校」は、防災の視点からも、未来を見据えた子供たちの望ましい成長のためにも大事であることは明白です。先生方には、魅力ある地域素材の教材化や授業実践を通して地域を理解し、関わりを深めていってほしいと願っています。

本校は、今年4月、東六郷小学校と統合し、学区域を拡大して新しい六郷小学校としての歩みを始めます。東日本大震災の教訓を胸に、「地域とともに歩む学校」としての学校運営に努めながら、地域の魅力について語り合う姿が見られる職員室にしていきたいと思っています。

地域とともに学ぶ 防災教育を目指して

滝川 真智子（柳生小学校）

東日本大震災から5年8か月が経過して、小学生であの震災を経験した児童は、もう在籍しておりません。児童に「自分の命を守ること」「他者と助け合って生きること」を、どのように理解させ、自ら判断し行動する力を身に付けさせるかが、今後の課題であると考えています。

10月に地域や保護者の皆様と連携し、西中田小学校、柳生中学校と共に「学校地域合同防災訓練」を実施しました。児童生徒は、大人に守られるだけではなく、自分にもできることや果たすべき役割があることを体験から学んでいました。「何か手伝いますか」と進んで行動する児童生徒の姿が見られたことは大きな成果だったと思います。学校で行う防災教育と、地域で行う防災訓練を関連させ、大人も子供も日常的な備えを見直し、他者との結び付きを深められるように、自助と共助を学ぶ取組の継続が重要だと考えます。今後も、防災という課題に向けて、地域と学校が共に工夫し「地域とともに歩む学校」の具体的な実践の一つとなるように努めてまいります。

編集後記

平成28年度も残すところわずかとなりました。この度は、会員の皆様の御協力により、『廣瀬川』第91号を刊行することができました。本号では、「仙台市教育振興基本計画」の理念及び、「杜の都の学校教育」に重点事項として示されたねらいを受け行われている「仙台自分づくり教育」に焦点を当て、仙台子ども体験プラザ（スチューデントシティ）での学習の取組と成果や特色ある「仙台自分づくり教育」を行っている学校の実践を座談会の中で具体的に御紹介いただきました。

また、専門部の今年度の取組や復興に向けた提言、震災から学び、復興に取り組む学校経営を实践されている新任の校長先生方の決意や熱い思いを寄せていただきました。本号が、未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、座談会に御出席いただきました仙台市教育委員会学びの連携推進室長 佐藤淳一 様を始め、御出席の校長先生方、そして玉稿を賜りました皆様に心から感謝を申し上げます。

（91号担当チーフ 佐藤記）

編集担当者：佐藤正文（岡田小） 後藤景子（南吉成小） 畠山厚子（鶴谷東小） 中廣治（将監小）